

バベルの塔

(創世記 11 : 1~9、I コリント 1~27)

今日の聖書の箇所をみると、面白いところがあります。神様が天から降りて来られて、人間が建てた塔のある町をご覧になりました。人たちは天まで届く塔のある町を作ったわけですが、神様がおられるところからは見えなかった、そして見るためにわざわざ降りて来られたということです。神様を人間のようなお姿でたとえて話をしていますが、そこには、人間の業がいかにも偉大で、天まで届いたかのようなものであっても、神様にとってはあまりにも小さいものに過ぎないことを意味しているのだと思います。そして、神様は私たち人間が成していることをすべて知っておられます。そして、私たちの世界に関与してくださる方です。なぜならば、私たちを愛するゆえに、そのままにしておけない、特別な存在として造られた私たち人間に対する、神様の関心と愛がここにも示されているのです。

人間が悪いことばかり思い計らい、人の悪が増えていくのを見て、洪水を通してこの世を裁く物語の後にすぐ、このバベルの塔の話が出てきます。そんなに大きな神様の裁きの厳しさを経験したのにもかかわらず、再び神様に背く人間の姿です。神様のむちも、救いの恵みと憐れみも体験したのにもかかわらず、神様とは関係がない、神様がおられない世界に向かう、私たち人間の心の頑なさや罪深さを考えさせられるところです。

世界中の人々は同じ言葉を使って、同じように話していました。平野を見つけ、住みついた人々はより良い世界を目指します。石の代わりにレンガを、しっくい代わりにアスファルトを用いるようになりました。生活の進歩、文明が発達していく様子が描かれています。もう移動し、さすらい生活は止めよう、定着し安定した生活を求め、築こうとするのです。そのような欲求は、ついには、天まで届く塔のある町を建てようとするところまで至るのです。自然のものだけではなく、人工的に作った便利なもの、大量生産ができるようになりました。それで、自信にあふれて言います。「さあ、天まで届く塔のある町を建てよう」。その理由の一つは、有名になろう、ということでした。自分を知らせ、自分を知ってもらいたい、そのような願望です。力ある指導者たちは帝国を建設し、自分の業績を示して自分の名を残すために、いろいろな見えるものを作ろうとします。強力な国作り、町作りのためには、力ある指導者の下に、働く人がいなければならないのです。それは素晴らしい夢、希望のように見えますが、多くの人々の奴隷化を意味します。エジプトにいたイスラエルの人々はエジプトの都市建設のためのレンガを作る奴隷の生活をさせられていたのです。人間が有名になろうとするときには、支配する者と、支配される者が生じ、互いに人間らしさを失ってしまうのです。

天まで届くというところには、人間の世界を越えた、神様の聖なる領域まで入ろうとする、人間の傲慢と欲望が表わされています。エバのところに来てささやいたサタンの誘惑は神が禁じたものに手をつけさせることでした。人間は、絶えず神様が禁じた世界を、人間が人間らしく生きるために越えてはいけない制限されている自由を受け入れず、自己中心になり罪を犯してしまうのです。なぜならば、有名になろう、つまり、神の名ではなく、自分の名を知らせたい、自分を誇りたいのです。人間は自分の名のために、神様の力ではなく自分の力でよりよい生活を目指して天まで届こうと試みるのです。

町の中心に高い塔があるということは、人々の道しるべになり、生活の中心になります。神様で

はなく、自分たちの業績に目を留めさせるのです。

そして言います。全地に散らされることがないように一緒に力を合わせよ、そして、この地で揺らくことがない、安全と繁栄の樂園を作りましょう、ということです。神なき世界です。

神様はわたしたち人間を祝福して言われました。(創世記 1:28)「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」と。神様はこの地の隅々まで、人間が散らかってこの地に増え、支配し、管理するように命じておられたのです。そうなのに、人間は一つのところに固まって自分たちの力を寄せ合い、誇示しようとするのです。神様の命令に反することです。人間は天まで届こうとしましたが、神様は降りて来られました。そして、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が分からないように、聞けないようになさいました。彼らはこの町の建設をやめました。やめるしかなかったのです。言葉が通じ合わない人間が共にいることは辛いことです。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれました。混乱という言葉ババルとバベルの塔の言葉の関連性が示されています。バベルの塔は人間が自分たちの中心を作り、天まで届くほどの素晴らしい世界を夢見ましたが、その結末は虚しく、混乱でありました。

人間は中心を喪失した状況になってしまいました。混乱の中をさまよい、言葉が通じない人間同士の断絶に直面されました。神様との断絶、人間同士の断絶、それは混乱した私たちの世界を物語るものです。そのような人間の世界は血まみれの世界、お互いに殺し合い、奪い合う世界になるしかないのです。力を合わせようとする試みは常にありますが、結果は散っていくしかない宿命的な混乱に陥り、呻き苦しむしかないわたしたちの世界になりました。

このような私たちの世界に救い主イエスが来られました。違う意味で神様がこの世に降りて来られました。裁きは恵みになり、混乱な世界に秩序と平和を与えようと神様がなされたのです。新しい言葉、新しい中心点、主イエス・キリストを与えてくださいました。主イエス・キリストの十字架こそ、私たちの塔です。そして、聖霊の働きによって、皆が聞いて分かる言葉、新しい言葉が与えられたのです。「ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」(使徒言行録 2 章 11 節)と聖書には記されています。異邦人たちが語る言葉が自分の国の言葉として分かる不思議なことが起こりました。聖なる霊によって人間の言葉を越えた言葉、聖霊の新しい言葉で神様の業の一つになって聞く分けることができたのです。

主イエス・キリストという中心点が与えられ、そのもとに私たちは集まります。そして、神の命令を遂行するために、この世に散らかっていきます。主イエスを通して、混乱は秩序になりました。私たちは人間が作ったバベルではなく、イエス・キリストの十字架を見るのです。ここに神様の裁きではない、恵みと愛に守られて生きる町、神の国が建てられるのです。

使徒パウロは言います。「神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました。(I コリント 1:27)」

いかに大きな恵みでありましょう。自分を誇って自分の名と業績を残そうとする者は虚しくなるのです。しかし、どのような私であっても、主の十字架を仰ぎ見るものは、神の国に生きることができるのです。生きても死んでも主の御手のうちに生きるのです。わたしたちは、ここに集まって礼拝を守りながら主によって新しくされ、混乱のこの世に向かって散っていきます。主によって造られた恵みと愛の世界に属しているのです。私たちを選んで、このような神の国に招き入れてくださった、主の御導きに感謝しましょう。

バベルの塔の話は神様の裁きではなく、私たちに向けられた神様の関心と愛の物語であるのです。